

茨城高等学校・中学校

## 校長室だより

2024年3月19日

この文章は、茨城高校生徒会誌『轟（とどろき）』15号（令和6年3月1日発行）に寄稿したものです。中学生にも読んでもらいたいと思い、「校長室だより」でも配信します。長い文章ですが、じっくり読んでみてください。

### なめとこ山の熊／いのちの授業

昨年の夏の終わりから秋にかけて、熊が人を襲う事故が頻発しました。環境省によると熊による人身被害は、統計を取り始めて以降、発生件数、被害人数ともに最多とのことです。熊被害が急増した要因として、熊にとって大切な食料となるブナ科の樹木の木の実、ドングリの凶作があげられています。山中で十分な食料を得られない熊たちは、食物を求めて人里に下りてきて、そこで出くわした人間を襲うにいたったのです。

10月、秋田県内陸の小さな町で、えさを求めて住宅地に侵入したと思われる親子の熊が作業小屋に隠れているのが発見され、自治体は、罠で捕獲した二頭の熊を殺処分したと発表しました。このニュースが報道されるや、この小さな町の役場には全国から抗議の電話やメールが殺到しました。「人を襲っていない熊をなぜ殺す必要があったのか？」「ニュースを聞いた子どもがショックを受けている。子熊だけでも助けるべきだった」「捕獲した時点で住民の安全は確保されている。山中に逃がす選択肢があったのではないか？」中には名前も名乗らず感情にまかせて暴言を吐いたり、何十分も切らずに抗議を続ける電話もあったとのことです。

一方で、この抗議のニュースが報じられると、今度は抗議を行った人たちに対する非難の声があがりました。「熊出没区域に居住する人たちの不安や恐怖を都会の人たちは理解していない」、「熊を山中に逃がしても食物の味を覚えた熊はまた人里に下りてくる」、「熊の殺処分に反対する人たちは自然を理想化して実態を無視している」などの意見がSNSなどを中心に多数発せられ、マスコミの多くもこれを支持する立場をとりました。

熊被害についての一連の報道に触れる中で、ふと筆者の頭に浮かんできたのが、『なめとこ山の熊』(注)の物語でした。「なめとこ山の熊のことならおもしろい」という素朴な語り口で始まるこの童話は、『銀河鉄道の夜』や『風の又三郎』とともに宮沢賢治の代表作のひとつです。

物語の主人公、淵沢小十郎は熊獲りの名人です。ポルトガル伝来という<sup>なりわい</sup>ような大きな重い鉄砲をもち黄色い猟犬を従えて尾根や淵をのっしのつと歩いては、熊を獲ることを生業としています。狩られる側の熊たちはといえば、木の上や高い崖の上から、小十郎が沢を渡ったりあざみの生えたところを歩くのをおもしろそうに眺めています。「一ぺんに言ってしまっって悪いけれどもなめとこ山あたりの熊は小十郎をすきなのだ」と、熊と小十郎の関係性が説明されています。

しかし熊たちも、小十郎の犬が火のついたまりのようになって飛びつき、小十郎が鉄砲を自分に向けてはすきではありません。迷惑そうに手をふってそんなことをされるのを断ったり、気の烈しいやつならごうごう吠えて兵十郎に向かってきたりします。そんなときでも小十郎は落ち着いて鉄砲を構え、熊の月の輪めがけてズドンとやります。そして赤黒い血を吐いて倒れた熊のそばに近寄ってこう言うのです。「熊。おれはてまえを憎くて殺したのでねえんだぞ。おれも商売ならてめえも射たなけあならねえ。ほかの罪のねえ仕事してんだが畑はなし木はお上のものにきまったし里へ出ても誰も相手にしねえ。仕方なしに獵師なんぞするんだ。てめえも熊に生れたが因果ならおれもこんな商売が因果だ。やい。この次には熊なんぞに生れなよ」

米国の神話学者ジョーゼフ・キャンベルが「アニマル・マスター」について述べています。アニマル・マスターとは、狩猟民族の神話に登場する動物を支配する神です。昔、狩猟によって生活を営んでいた人々は、たいがい一種の動物信仰を持っていました。信仰の対象となるのは、彼らに主要な食糧を提供してくれる動物です。アメリカ・インディアンにとってはバッファロー、北米大陸の北西海岸地方ではサケ、南アフリカではエランドという羚羊の一種などがこれにあたります。狩猟民族にとってこうした動物は単なる獲物ではありません。自分たちが生きるための糧をもたらしてくれる、いわば生命の源です。もちろん同時に、その命を奪うことに対する恐れや罪の意識も持っていたに違いありません。

彼らは、深い森の奥や、河の流れのかなた、高い山の頂に、こうした動物を支配する「主」がいると考えました。動物の主、アニマル・マスターは、人間に殺されることを目的に動物の群れを放ちます。動物たちは自分の命が復活の儀式を通じて、その命が生まれた場所へ、アニマル・マスターのもとへ戻るという了解のもとで、命を人間に与えます。人間は彼らの犠牲を敬う儀式をとりおこない、アニマル・マスターへの感謝と畏敬の念を捧げることで、自然からの恵みを受取るのです。

『なめとこ山の熊』には、このアニマル・マスターの神話を彷彿とさせるような、人と動物、人間と自然の緊密な結びつきが描かれています。

ある年の夏、獵に出た小十郎は、大きな木の上にいる熊を見つけ銃を構えます。すると、熊は小十郎に向かって「おまえは何がほしくておれを殺すんだ」と叫びます。小十郎は答えます。「ああ、おれはお前の毛皮と、胆のほかになんにもいらぬ。それも町へ持って行ってひどく高く売れるというのではないしほんとうに気の毒だけれどもやっぱり仕方ない。けれどもお前に今ごろそんなことを言われるともうおれなどは何か栗かしたのみでも食っていてそれで死ぬならおれも死んでもいいような気がするよ」とすると熊は「もう二年ばかり待ってくれ、おれも死ぬのはもうかまわぬようなもんだけれども少しし残した仕事もあるしただ二年だけ待ってくれ。二年目にはおれもおまえの家の前でちゃんと死んでいてやるから。毛皮も胃袋もやってしまうから」と頼むのです。二年後のある朝、小十郎が表の戸を開けると、そこには一頭の熊が口から血を吐いて死んでいました。小十郎は思わず拜むようにするのです。

仏教には「捨身飼虎」という教えがあります。お釈迦様は前世においてある国の王子でしたが、あるとき飢えた虎の親子に出会います。飢えのあまり母虎は二頭の子どもの虎を喰おうとさえしています。哀れに思った前世のお釈迦様は、自分の肉体を虎たちに与えてその飢えを救った、という話です。熱心な仏教徒であった賢治の脳裏には、約束を守って死んだ熊に仏の姿が重

ねられていたのかもしれませんが。

約束を守って死んだ熊にとって、命は自分の専有物ではありません。自然の掟の中では時として、それを必要とする他者に自らの生命を与えることが求められ、熊はあらがうことなくその運命を受け入れています。そうすることに対して、疑念すら抱いていないかのようです。小十郎も熊と同じ自然の掟の中で生きています。しかし、小十郎は奪う側の存在です。その死を代償に自分を生かしてくれている熊たちに対して、畏敬の念と同時に深い罪悪感も抱いています。そこに人間である小十郎の葛藤を見てとることができます。

物語は、小十郎の死で幕を閉じます。一月のある日、生まれてはじめて獵に出るのが気が進まないと言って家を出た小十郎は、雪のみねの頂上で大きな熊と鉢合わせします。小十郎は鉄砲を放ちますが、熊は嵐のように黒くゆらいで迫ってきます。「小十郎はがあと頭が鳴ってまわりがいちめんまっ青になった。それから遠くでこう言うことばを聞いた。／『おお小十郎おまえを殺すつもりはなかった』／もうおれは死んだと小十郎は思った。そしてちらちらちら青い星のような光がそこらいちめんに見えた。／『これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、ゆるせよ』と小十郎は思った。それからあとの小十郎の心持はもう私にはわからない」物語の最後には、冷たい月明かりに照らされた小十郎の死骸を囲み、まるで祈りを捧げるかのようにひれ伏す熊たちの姿が描かれています。

人間は、他者を殺すことによってしか生きられません。肉や魚はもちろん、米や野菜にいたるまで、私たちは自分以外の動物や植物の命を奪い、摂取することで生命を維持しています。その意味からすれば、私たちすべてが等しく“原罪”を負っているという見方もできるかもしれません。

しかし考えてみると、人間に限らずほぼすべての生物は他の生命を奪うことで生きています。ある個体の死は、異なる個体の生を支え、生命は大きな循環の輪を描きながら存続していきます。熊獲り名人として、自然とともに生きてきた小十郎は、そんな生命の仕組みを理解していました。理解していたというよりも、あるときは奪い、あるときは恵み、その時が来れば自然の中に帰って行くという生命のありかたが、小十郎にとっては疑念をさしはさむ余地もないくらい自明のことであったのだと思います。

1990年代のはじめ、小学校で豚を育て、成長したら殺して食べるという実践が話題になりました。この試みに挑戦したのは黒田恭史さん。その実践は黒田恭史著『豚のPちゃんと32人の小学生／命の授業900日』（ミネルヴァ出版）に詳しく述べられています。

大学院を卒業後、大阪府北部の山あいの小学校に赴任した黒田さんは、4年2組の担任として教師生活をスタートします。はじめて担任したクラスで、黒田さんは豚を飼うことを子どもたちに提案します。黒田さんの念頭には、生きている鶏や豚をさばいて食べることで子どもたちを命に触れさせるという、ある先人の教育者の実践がありました。夏休みに入って、ついに一頭の豚が小学校にやって来ます。準備しておいた豚小屋で飼われることになった豚は「Pちゃん」と名付けられました。4年2組の子どもたちは交代で餌やりや掃除を行い、豚を世話します。最初は「臭い」「怖い」と豚を敬遠していた小学生たちですが、慣れてくるに従って世話も上手になり、同時にPちゃんへの愛情も芽生えていきます。いつのまにかPちゃんは、「家畜」ではなく、4年2組の「ペット」になっていったのです。

冬が過ぎ春が来て、Pちゃんの飼育は5年2組に引き継がれます。豚を飼う小学生たちの話を

聞いて、テレビからの取材申し込みの話がとびこんできます。テレビ局は、Pちゃんと子どもたちの交流を継続的に撮影し、記録番組を制作しようとしたのです。一方で、将来Pちゃんをどうするかをめぐって、クラスでは話し合いが行われます。きっかけは「Pちゃんを食べるべきだ」と黒田さん自身が書いた学級通信でした。子どもたちの反応はさまざまでした。Pちゃんを殺して食べるなんてかわいそう、殺さなくても飼いつける方法があるのではないか、という意見が主流を占めました。なかには、この先ずっとPちゃんを飼いつけることはできないのだから食べた方がいい、という意見もありました。

この小学校では2年ごとにクラス替えが行われていたため、5年2組のメンバーはそのまま6年2組に進級します。6年生になってもPちゃんの処遇は未定のままでした。子どもたちの頭を悩ませたのは、Pちゃんを殺したくないのはもちろんだが、自分たちが卒業した後はどのようにしたらいいのか、自分たちにどのような責任ある行動がとれるのか、という問題でした。3月の卒業が迫ってくるにつれ、Pちゃんをめぐる議論は白熱し、「殺す派」と「殺さない派」に分かれクラスを二分する激論に発展します。わずか12歳の子どもたちが、ぎりぎりの苦しい選択を迫られ、それでも逃げずに問題に向き合い、全身全霊の思いをことばにしていく様子は、今読んでも胸に迫るものがあります。出口の見えない話し合いは卒業式前日まで続けられ、最後の結論は担任の黒田さんに委ねられることになりました。黒田さんの出した答えは「Pちゃんを食肉センターに送る」でした。

「32人の子どもたちは身一つ動かずに聞いていた。誰も何も言わないでいた。沈黙の時間だけが流れていた。『先生が出した結論です。』授業の終わりを告げるチャイムの音が向こうの方で流れていた。森浦悟伸と水出奈津美はずっとPちゃんの方を見ていた。『それでいいか。』私は磯野祐介に最初に聞いた。絶対に食肉センターに持って行ってほしくない最後まで頑張り通していた磯野祐介は黙って頷いた。私は、一人ひとりに同じ質問をしていった。みんな涙がこぼれ落ちそうになるのを必死で堪えていた。浜口麻由美にも聞いた。彼女は答えないでいた。私はお願いだから答えてほしいと思っていた。もうそれ以上、一人で重い荷物を背負わなくてもいいと願っていた。『はまちゃん(浜口麻由美)、もう十分やったんと違うか。もうそんなに頑張らなくてもいいよ。』彼女の目から大粒の涙がこぼれていた。私の目からも、涙がこぼれ落ちてしまっていた。小屋の中では、Pちゃんが何事もなかったかのように、『ブヒー、ブヒー』と鳴いていた」

黒田さんと子どもたちの実践を記録したビデオはNHKスペシャルとして放送するために編集されますが、最終段階でNHK側からキャンセルとの通告があります。その理由は、「これが果たして教育なのか」というものでした。紆余曲折を経て、ビデオは民放のテレビ番組として放送されますが、インターネットの普及していなかった時代、番組終了と同時にテレビ局の電話は鳴りっぱなしになったといいます。その半分は「すばらしい教育だ」という意見、半分は「これは教育ではない」という意見でした。

かくいう筆者自身、誰かに「黒田さんの実践をどう評価しますか」と聞かれたら、答えるにあたって相当悩むと思います。普段私たちがスーパーで購入しているパック詰めの豚肉は、実は一頭の豚の命を奪うことではじめて私たちの手元に届くという事実を、単なる知識としてでなく、体験を通じて子どもたちに理解させることの意義は大いにあると思う。しかし、ひとつの命が奪われていく過程をありのまま子どもたちに経験させるという方法は妥当なのか。まして、自分たちが育

ててきた豚の生死についての決断を小学生に求めるのは、あまりに苛酷なのではないか、という考えが真っ先に浮かびました。その一方で、人工物に取り囲まれ、リアルな自然と隔絶した日常が当たり前となった現代、生や死について、観念としてでなく子どもたちが理解する機会をどうやって保障していったらいいのか、という問いについての対案は思いつきません。

教育者としての立場からすれば、「Pちゃんを殺して食べる」があるいは正解なのかもしれません。そうすることで、人間は何かを殺して生きている、他者からもらった命は自分が生きることにつながっていくと理解させることができる、というのが正論かもしれません。しかし、それに素直に納得できない、胸につかえる何かが筆者にはあります。

東京大学医学部名誉教授の養老孟司さんが、朝日新聞の連載記事「AIと私たち」のインタビューの中で、生成AIについて「いくら『それらしい』応答をしても、ある言語体系の中の文法やルールに従って、人間の質問に続く可能性の高い文字列を並べているだけ。AIの内部では、一つ一つの単語（記号）は経験や感覚に対応（接地）しているわけではない。要するに、人間の問いの意味と意図を理解していないということです」と述べています。

この記事を読んで、「Pちゃんを食べて、子どもたちに命について理解させるべきだ」という「正論」に筆者が違和感を覚える理由は、おそらく、そのことばが実体をともなった経験に根差していないから、「接地」していないからではないか、と考えました。「Pちゃんを食べる」という選択は、理屈としては正しいかもしれませんが、そこにPちゃんの生死をめぐる子どもたちのぎりぎりの葛藤が入り込む余地はありません。命の問題には模範解答はない。模範解答を求めようとしたとたんに、その解は底の浅い、陳腐な「正解」になってしまうのではないか、というのが、今筆者の出せる答えです。

養老さんは、同じインタビューの中で「人間の理性は、『ああすれば、こうなる』という因果律で考える癖がある。見えているのは、論理や計算で予測可能な世界のみ。逆にコントロールできないものは排除する」とも述べています。しかし人間の内側には、理性だけでは到達できない場所が間違いなく存在しています。論理やことばでは捉えきれない、自分が生きて経験した身体感覚によってはじめて認識可能な領域があります。「命の問題」は、まさにそこに属しているのではないか、と思うのです。

トラックに乗せられ食肉センターに向かうPちゃんを見送る子どもたちの涙や、仕留めた熊の骸むくろを前に静かに頭を垂れる小十郎には、ことばや理屈をこえた深い命の体験がたしかに存在していると思います。獲物を授けてくれた自然の主に感謝の儀式を捧げた、かつての狩猟民族たちも同様です。

私たちのまわりには数値化された「死」がうずたかく積み上がっています。災害による死、事故や事件に関連する死、そして戦争が生み出す死。本文を書いている2024年1月半ば、能登半島地震による死者は200名を超えたとの報道がなされています。また、イスラエルとハマスの戦闘開始以来、ガザ地区での死者数は2万4千名に達したと現地の保健当局は伝えています。私たちはその死者数をテレビやインターネットを通じて知ることができますが、彼ら一人ひとりが、何を愛し、何に喜び、何に憤り、何を求めて生きたのか、そしてその死は誰によってどのように悲しまれたのかについては一切知るよしもありません。しかし、そこにあるのはまぎれもなく、他の誰とも異なる唯一無二の生を生きた、尊厳ある人間の死であることが置き去りにされてはなりません。

